蛙が鳴いたら雪が降る

星森アキラ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある出来事によって五感が鈍くなり色素も薄くなってしまった少女ノエルと

それを補うように幻覚をかけてくるも容赦なく見透かされるフランがいました。

しかしとある日、フランは片目が赤い男の人たちと修行するといいノエルはまた別の黒い格好をしたヴァリアーという人たちに預けられることになりました。

そこからノエルの人生は大きく変わるのでした。

！注意事項！

厨二病設定てんこ盛り

夢小説の為オリジナルの属性、ストーリー、キャラ等出てきますが一部原作沿いの部分が出てきます。

恋愛描写、流血表現等あります。

・重要なメインキャラは出てき次第追加予定です！（重要）

自分の〝好き〟を書きたいと思ってるので駄文かと思いますがそれでも読むよ！って方はゆっくり読んでいってね!!!

@ｈｏｓｈｉｍｏｒｉａｋｉｒａ　ツイッターにて挿絵では載せれなかったらくがきやファンアートを描いています。よろしければこちらも是非！

目次

プロローグ
1．二人の子供 1
2．黒色の夢 4
3．白い炎 8
4．背中の温もり 12
5．ただのチーズ 15
6．小さな赤ちゃん 19
7．幻覚という言葉を知りました 22
8．提案 27
9．また会える日まで 31
10．自己紹介 34
ヴァリアーと生活編
11．新しいお家 38
12．お揃いの仲間 42
13．暴走 46
14．トラウマ 51
15．血溜まり 56
16．ボクと私 59
17．素敵な食卓 63
18．不安の矛先 66

プロローグ
1．二人の子供

ここはフランス…奥地にある小さな村に二人は住んでいた。
のびのびと暮らせるようにという言い訳と共に祖母に預けられた…という理由からなのか、はたまた二人の遊びが普通と違うから周りの目を避けたかったのかは定かではない。
そんな二人の物語である。

「フランーどこー?おばあちゃんがご飯だーって呼んでるよー」
その子供はなにもない木に向かって、まるでお化けにでも話しかけるように声をかける。
側から見たらおかしな行動だがこの小さな村に住む人々は彼女がおかしい子供だ、とは思っていない。
否、おかしいのはなにもいないということなのだ。
フワッと強い風が起こり一瞬目を閉じる。
すると薄い霧がかった場所から一人の少年が現れた。
「なんでミーの場所がノエルにはわかるんだー…」
つまらない!とでも言うように残念そうに彼はひょいと木から降りてきた。
「見えないのにあんなにはっきり映されたらわかるもんはわかる。
私の体質一番わかってるくせに!」
「わかっててもミーのマジックを見破られるのは嫌だしー…そういうデリカシーのなさが男に見られる証拠なのにー」
その一言にムッとノエルの眉間に皺が寄る。
彼女は仮にも〝女の子〟なのだ。
中性的な顔立ちにかつ素朴で全身を黒と灰色で包む服を普段から着ているものだから側から見れば男の子にしか見えない。
しかも、遊びも遊びでフランに付き合い危険なことばかりして遊ぶのだから周りもあまり女の子扱いをしない。

極稀にフランと同じようにからかいだすと怒られるぐらいだ。
こうして男の子扱いされる方が必要とされてる感じがして嬉しかったのだ。
だからなにも問題はない。
問題ないが気には触る…ノエル自身にも子供ながらわかってるがとてもめんどくさい性格だということが…
まぁ、当の本人はその性格を治す気すらないようだが
「フラン、手」
んっと差し伸ばされる手をいつも通り握り前に進む。
フランのマジックが解かれいつもの景色になったからだ。
「うわっ！手に汗ついてるー…ばっちぃ！」
「うるさい！本当になにも壁が無いかとか怖かったんだから！仕方ないの！」
「ほんっと…いつ治るのそれー…じゃないとすぐ見破られて溜まったもんじゃないのにー」
ブーブーと言いながらもしっかりと強めに手を握ってくれるフランに安堵の溜息をつく。
そう、ノエルは目が不自由なのである。
というよりも視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚…五感がある日突然鈍くなったのである。
鈍くなったというだけでなくなったわけではないのでそこそこ鈍臭い人間、という感じだ。
原因は定かではない…というのもその辺の時系列を全くもって覚えてないのだ。
否、思い出したくないと言った方がいいのかもしれない…。
丁度その時期にだろうか、髪の毛と瞳の色素が失われたのも…
どんな色かも思い出せないけど今の私は気持ち悪いと言われても仕方がないと思っている。
例えるなら…そうフランは私のことを見て蛇と言っていた。
ふと歩みを止め目の前にある川に映る自身を見つめる。
…何度見ても奇妙な色だ。

真っ白の髪に紅の瞳、肌は白い方だが特に紫外線を浴びても何ともないため至って健康だということはわかる。
「もーノエルーご飯なんでしょー帰るよー」
グイッと引っ張られて我に帰る。
ごめんごめんと謝る仕草をするとうえーっという顔をされた。
変なことを考えたのと強く握ってもらってるせいで熱がこもったのかねちょっとした感触がノエルにもわかった。
触覚の鈍いノエルでもわかるのだ…フランは相当気持ち悪いのだろう、引っ張りながらせかせかと歩きだす。
もう日が落ちかけている。
早く帰らないと怒られる！なんて言い合いながらいつもより早足で二人は森を後にした。

2. 黒色の夢

何日か前に夢を見た。
フランが誰かに連れていかれて離れ離れになるというおかしな夢だ。
この夢を見たのは…確かフランが未来がわかるようになったかもしれないなどと変なことを言っていた為、いつものマジックで景色を見せてもらいながら詳しく話を聞いた日なのでよく覚えている。
多分、長時間見せてもらってたからかフランも私も気分が悪くなりその日は丸一日寝込んでしまった。
その時に見たのがあの奇妙な夢…話を聞いたばかりだから見たんだって割り切ってたけど妙にリアルだったのでよく覚えてる。
そんでもって今も変な夢を見てる。
お城のようなお部屋に黒い服を着た人がいて…それで壊されないようにとか話してる。
そしたら黒髪の男の人が出てきて喧嘩し始めて…しかも殴り合いで血も出てる。
やだ、こんな夢早く覚めて…これ以上痛いのは見たくない。
黒髪の男の人がこっちにくる。
やだ怖い…助けて…助けて！
「…けてっ!!フラン…!?イッ!!」
慌てて飛び起きたせいで何かに思いっきりぶつかった。
めちゃくちゃ痛い…目頭が熱くなってきた。
「うぅ…痛いー…なにするんだノエルー！うなされてるから何事かと思って頬っぺた引っ張っただけじゃないかー」
「そんなこと言ったってぇ…変な夢を見てたんだもん…てか重いから退いて」
あぁと思い出したかのように馬乗りしてたフランが横にずれた。
悪夢を見たのはこいつの重みのせいじゃないのか…とか思ったりしたけどフランのことだ。
また同じようにされたくないため黙っておくことにする。

「夢はわかるよー。うなされてたって知ってるしー…とりあえずどんな夢だったー？」
ぶつかったであろう頭を痛い痛いと抑えながらフランは尋ねてきた。
遠回しに謝れって言ってるみたいなので絶対謝ってやんないとか考えながら夢の内容を話した。
わかる部分を正確に話すと前に見せてもらったようにマジックで形を作ってくれる。
前とは違ってお人形みたいなのでだしてくれたので気分は悪くならなかった。
「その時ミーはそこにいたー？」
「ううん、この夢ではいなかった。なんか黒い服ばっかで怖かったし…殺すとか聞こえてきたから本当…怖かった…。」
ふーんと興味無さげな返事をしつつもちゃんと手を握ってくれる辺り心配はしてくれてるようだ。
「ま、気にしなくてもいいんじゃない？ミーが前見た夢みたいにどこかに行ったとしてもノエルならすぐ見つけれるしー」
「え…？どういうこと…？」
ギュッ…と握る手が強くなる。
なんでわからないんだって呆れた顔をしながらはぁと溜息をつかれた。
「ノエルはいつもミーを見つけるし、どれだけ離れても絶対見つけて連れ戻すからグレようにもグレれないしー」
「そ、それは仕方ないでしょ！フランの見せるものはボクにとって綺麗に見えすぎるの！それにフランのマジックだって分かれば元通りに景色はぼやけだすし…」
んー…と握る手と逆の手を顎に当て考えるポーズを取りながらフランは立ち上がった。
ので私も一緒に立ち上がることにする。
部屋から出てとりあえず朝ごはんを食べに行くようだ。
部屋から出るとちょうどおばあちゃんがいたのでおはようと声を

かける。
フランはボーッとまだ考え事をしているようだ。
椅子に座っても手を離さないのが何よりも証拠だ。
「おやおや、今日はどうしたんだい？」
「なんかフランが考え事をして止まらないみたい。あ、後で洗い物一緒にするから見ててほしい！」
「あらま、お皿はまだ危ないからね…夜スープでもしてその時の木の皿なら洗ってもらおうかね。」
おばあちゃんはなによりも私のことを傷付けないように気を付けてくれる。
それもそのはず、来たばかりの時おいてもらうのだからできることは手伝わなきゃ精神でなんでもやろうとしてお皿を思いっきり落としてそれを手で拾っていつのまにか血塗れになってたことがあるのだ。
ある意味トラウマなのだろう。
私は感覚が鈍いため痛みもなにも感じられなかった為ポタッと落ちた血を見るまで気付かなかったのだ。
それからは力加減がわかるまで子供は子供らしく外で目一杯遊んでたくさんそこで怪我をしなさいと怒られた。
お皿を割ったことに謝ったがそこは気にしなくていいからフランが悪さをしないよう見張っててちょうだい。それがノエルに出来る一番いいお手伝いだよ。と言ってくれた。
それからは出来るだけお手伝い…というよりリハビリ感覚で色々とするようになった。
といっても包丁や火元などには近づくことは禁止されてる。
はい、と軽く焼いてもらった卵とベーコンが置かれる。
パンを取りたいがフランの握っている手が邪魔で取れない…
「フランーご飯食べるよー」
おーいと顔の目の前に手をブンブン振る。
するとハッ！と気付いたかのようにフランが口を開いた。
「ミーずっと考えてたんだけどねーなんで五感が鈍ったーとかいって

るのにミーが魅せるものは綺麗に見えるのか…」
「ん？どういうこと？フランが見えてる景色がボクに見えてるんじゃないの…？」
「ミーもそう思ってるんだけどねー。他の人に聞くとそうでもない人もいるみたいでー…まぁ、考えるのもめんどくさいからいっか。いただきまーす。」
「あ！私もいただきます！」
パッと離された手が少し震えたので慌てて手を合わせて私もいただきますをする。
あれ…震えた…？なんでだろう…嫌な予感がする…？
よくわからないけどとりあえずごはんを食べようと目の前のパンに手を出す。
すると横からスッと手が出てきて取ろうとしたのを取られる。
「あー！私のパンー！」
「違うよーこれはミーがとったからミーのパンなんですー！」
いつもの光景と言い争いにさっきの嫌な予感なんてすぐ忘れてしまった。
こんな日々がずっと続いたらいいのにーなんてわがままだったのかもしれないね。
あの夢は私の予知夢だったと知るまで後もう少し―

3．白い炎

少しだけ時間が過ぎて夕暮れ時、晩御飯の準備ができたのでフランを探しに来たところだ。
いつもなら一緒に遊んでたところだけど今日は買い出しの手伝い等で忙しかったのだ。
といっても単なるノエルの我儘でお手伝いしたいと願ったからだ。
そんなこんなでこんな時間になった訳だが…フランが一向に帰ってこないし気配もない…。
「フランー…？」
いつもいる場所を隈なく探しても見当たらない…いや絶対またどこかでうまいこと隠れてるだけ…だよね？
「お、ノエル！どうしたんだい？こんな時間に出歩いて…フランと喧嘩でもしたのかい？」
声を掛けてくれたのは近くに住む髭を生やしたおじちゃんだった。
私がこの時間フランと歩いてないのはおかしいと思ったのだろう。
なんせいつもならフランがノエルの手を引っ張って歩いてるような時間なのだ。
「…もしかして…」
ふと頭によぎったのはあの夢…
フランが連れ去られた…？
「…あっ！おいノエル!!」
ダッ!!とおじちゃんの脇をすり抜けてあの夢に出てきた滝の場所まで向かう。
まだ、まだ辛うじて景色は見える。
はぁはぁと息を切らしながら森の中へ走っていく。
ガッ！と腕を擦ろうが脚をぶつけようが関係ない、痛みはそれほど感じない。
と、その時グイッと引っ張られる感覚がした。
「…っ！フラン!?」
違った。

ただ服が木に引っかかってるだけだった。
途端に目頭が熱くなって視界がもっとボヤけていく…グッと堪えながら引っかかった服を外そうと力を入れた。
ビリッ!!という音がした。
私の届くのだ…やばい…かなり破れてしまった。
おばあちゃんに怒られるとかそんなこと考えてる暇なんてない。
ザーーッと滝の流れる音が近い…もう少し、もう少しで着く!
景色がパッと開いた時にはもう一番星が見えていた。
顔を左右に振って確認してみる…が…いない。
人の気配が全くしないのだ。
そういえば夢の中の景色は昼間だったような気がする。
ということはもうフランはここにいない…?
ガクッと脚が折れ地面に手を着いた。
ポタポタと上から降ってくる滴が服を濡らしていく。
雨かと思いパッと空を見た…が先程星が見えたのだ。
ふと自分の頬に指を置いてから目元に持っていく。
「あぁそっか…私が泣いてるんだ…」
気付いたらドンドン溢れてきて止まらなくなって…うっうっと声も出るようになっていた。
息がしにくい…フランがいなくなる…嫌だ。
前みたいに憂鬱な気分になるのは…もう…嫌!!
「フランのバカーーッ!!!!」
うわあぁぁあんと泣き声を上げるとその声に驚いたのか鳥達がざわざわと飛んでいった。
否、泣き声に驚いたのでない…ピシッ!という音で我に返り自分の手を見つめる。
あぁ嫌だ。またフランがマジックをやって驚かそうとしてるんだ…ってそう思いたかった。
でも私は〝これ〟を知っている。
手から出る白色の奇妙な炎…所々紫色が混じっているのが更に奇妙でしかも手を振っても擦っても消せない、感覚も鈍いから熱くも感

じない。
「い…や…なんでまたこんなの…ハッ！そうだ水！川の水につけたら消えるはず…!!」
立ち上がって手を川の水につけようとした。
その時、ピシピシッ！と川の水につけようとした手の周りから氷のような物が出来始めた。
ヒッ！と怖くなり後ろに尻餅をつく。
と同時に手をつけた部分からじわじわと氷のような物が出来始める。
「ヒャッ!!や、やだ!!」
かすれた声を荒げながら炎を灯した手を胸に引き寄せる。
「消えろ！消えろ!!こんな姿見られたらボクは…ボクは…!!」
消えてくれ…そう願っているとドンドン炎は広がっていく。
どうすればいいのかわからない。
怖くて涙も止まらない。
けど、この姿を受け入れてくれた人が過去に約1名…
「…フランに…フランに会わなきゃ…探さなきゃ、見つけなきゃ…!!」
覚悟を決め自分の勘を信じ川を下っていく。
このまま出会わなかったら…と不安になればなるほど炎は広がっていく…。
涙でぼやけて前が見えない…でも腕には炎が…なんて考えても仕方ない！
グイッと腕で顔を拭う。
よしっ！と周りを見渡す。
奥の木々までハッキリと見えた…見えた？
「あれ…見える…?!フランが近くにいるんだ!!」
絶対そうだ！と確信しどんどん下まで降りていく。
走って走って走りまくった。
でも息が切れない…もしかしたらこれは夢なのではないか？とか考えたけど今はどうでもいい。
とにかくフランを見つけなきゃ…!!

ぼうっとまた炎が広がる感じがした。
ピチャリッ…遠くの方で音がした。
人の気配もする。
希望を持ちどんどん音の方へ、人の気配がする方へ走っていく。
「フラン…!!」
「ヒッ!!お化けだーー!!!」
…違った。
全く知らない人だった…。
投げ捨てられたランタンが割れてチカチカと光が消えたりついたりしてる。
グッと堪えていたものが込み上げてくる。
と同時に炎がどんどん身体を包んでいく…熱くない。
音が聞こえる…人の足音だ。
この足音…聞いたこと…ある?
「…フ…フランのバカあああ!!隠れてないで…出てきなさいよ!!」
ブワッと炎が全身を包み辺り一面を氷の世界へと包み込んだ。
その氷はまるで道のようになっており、そのまま前に進めと言わんばかりに一本道と化していた。

4．背中の温もり

「ここを渡れっていうの…？」

真っ直ぐできた氷の道を見ながらノエルは呟いた。

氷のはずなのに足をつけると滑らずにピタッと止まる物凄く歩きやすい道だった。

おそるおそる一歩ずつ渡って行く…

「何してるんですかー？」

声が聞こえる方に顔を向けると川を挟んだ向こう岸にリンゴの被り物をしたフランがいた。

何か変だ…どこからどう見てもフランにしか見えない…でも何か心に突っかかって気持ち悪い…。

「あ…なたは…」

「ノエルー？」

「…っ!?フラン…!?」

バッと後ろを振り向くとそこにはいつものフランがびしょ濡れの状態で立っていた。

くしゅん！と後ろにいるフランがくしゃみをして私はハッとした。

「あいつ…フランじゃ…ない!!」

嘘つきは嫌いだ。

嫌なものはは壊してしまえばいい。

グッとニセモノのフランを見つめただけなのにバキバキと音を出しながら氷の矢が胸に突き刺さった。

それと同時にサアァ…とニセモノのフランが消えていき気持ち悪さも無くなっていった。

しかし、あの時本気で殺してしまおうと考えてしまった自分もいて…自分が自分でなくなるような感覚がノエルを覆う…炎がどんどん広がっているのだ。

炎に飲み込まれてしまいそうで、でもいっそのこと飲み込まれた方が身体は楽になるんじゃないかと…ノエルはそう思い目を閉じようとした。

「ノエル！」
その声にハッと我に帰る。
ボクは何をしようとしていたんだ？
フランを探しにきたんじゃないか！
「～っ!!フランのばかぁぁっー!!」
一目散にフランに飛びつき抱きしめた。
シュウウッと音を出し炎が徐々に消えていった。
まるで不安が取り除かれたから消えていったかのようで安心感もありまた泣いた。
「…ごめん。」
やけに素直に謝るフランがすこし怖かったがそれ以上に見つけられたことに喜びを感じずにはいられずさっきよりま強くギュッと抱きしめた。
パリンッという音が聞こえて後ろを振り向くとそこにはもう氷の道は無くなっていた。
「ノエル…とりあえず意識があるんだねー。よかったーめんどくさいんだよねーおんぶして帰るのー。」
あぁ、いつもの憎まれ口だ。
背中を撫でながらフランは大きく溜息をついた。
ん？でもまてよ…連れ去られたんじゃなければなんでこんなところにいるんだろう…？
「あの…フラン…？なんでこんなところにいるの…？私てっきり…」
連れていかれたのかと…と続けようとしてやめた。
本当にそうなってたところだったらボクはあのまま炎に飲み込まれて…。
「んーとりあえず暇だったから川で溺れてるフリをして流されて遊んでたらそのまま海まで流されてたねー。こりゃまた帰ってくるのが大変だったねー。」
フランの言葉でボクの思考は遮られた。
というか待って、川で…流されて遊んで海まで行った…？
「な…ななっなにしてんの!!このバカフラン!!なんかさっきおんぶが

めんどくさいって言ってたけどしろー！おんぶして帰れー!!」
「わーノエルが怒ったー。超怖いなー逃げた方がいいかなー。」
「だ、ダメ!!」
するりと手を離し逃げようとされたのを腰に手を回して止めた。
するとわあぁ！と言いながら二人で地面にぶつかった。
脇腹に顔を埋めてぐすんぐすんと鼻をすする音で観念したのか、フランはまたはぁと溜息をつき身体を起こしながら頭を撫でてくれた。
「もう、ミー離れしてよー…ゲッてかなにその格好ボロボロじゃない…」
「えっ？あっ、その…走ってたから？えへへ」
「もう…怒られるのミーなんだからさー…前みたいに誤魔化すと後が怖いからやりたくないしー」
「…ごめん…なさい。」
「んっ、ミーの気が変わるうちに乗って」
早くと急かしながらも背中をこっちに向けてくれた。
おぶってくれるの？と聞くとこくんと頷いてくれたので思いっきり飛びついた。
うっ！という声を出しながらもちゃんと背負ってくれるところが本当に優しくて大好きで…そんなこと口が裂けても今は言わないが代わりに抱きついた。
「もう…勝手にどこかいかないでよね…」
ぼそっと呟いた言葉にフランはまたブスッとした顔をした。
そのまま背中の温もりに安心したのか泣き疲れたのか眠ってしまった。
フラン大好きだよっと口が裂けても言えない事を寝言を言っていたのはここだけの話。

5．ただのチーズ

怒られた。
こっ酷く怒られた…。
あの後、フランにおぶられながら眠っていたが家に着く前に最後に言葉を交わしたおじちゃんがライトをこちらに照らしてきたので眩しさにうっすらと目を開けた。
「フラン！ノエル!!無事だったのか!!」
村の大人達が心配そうにザワザワと集まってきた。
よかったよかった！という声でノエルは完全に目を覚ました。
スルッとフランの背中を降りて手を握る。
「ノエル…一体何を言って出てきたのー…めんどくさいことになってるー…」
「あ、あはは…切羽詰まっちゃってたから…その…ね？」
夜遅くまで遠くに行って帰って来なかったこともだがボロボロになった格好を見てなにか事件に巻き込まれたんじゃないかという話になりノエルが慌てて説明をしたらめちゃくちゃ怒られた。
フランもフランで川に流されるなんてバカな遊びをしてたもんだから近所のおじさんにまで怒られてた。
今〝一応〟女の子なんだからって言った人は誰だ…後で私も怒り返そう…なんて考えてた。
迷惑かけてごめんなさいと言うと何はともあれ無事だったからよし！という掛け声でみんな解散し自分の家へと帰っていった。
「おばあちゃん…ごめんなさい…服もボロボロにしちゃった…」
「もう、本当に心配かけてー…でも無事でよかったわ。さぁ！早くフランとお風呂に入っちゃいなさい！」
「うー…眠くてお風呂めんどくさい…」
「こら！女の子がそんなこというんじゃありません！フランも！早くノエルを連れて入ってちょうだい！」
ちぇーっと二人で言いながらお風呂場まで行った。
いつものようにちゃちゃっと汚れたところだけを洗い流し背中だ

けタオルで拭ってもらった。
いつもめんどくさがり通しなので適当だが今日はおばあちゃんの機嫌をこれ以上損ねないためにも髪の毛を念入りに拭いた。
二人で鏡合わせになり水滴が落ちてないか確認し、よし！と声を合わせてから服に着替え台所まで…行こうとした。
その時だった。
「…フラン？」
家の中だから手を繋がなかったのが失敗だった。
左右をどこを見渡してもどこにもフランがいない…。
あの時みたいに視野が良くなれば…なんて思ってふと手を見てしまった。
「ダメだ！ダメだ!!あんな怖い思いしたくない!!」
また気持ち悪がられたくないから…と首をブンブン振りながら自分に言い聞かせるように呟いた。
そんなことよりもフランだ！あれだけ言ったのにまたどこかへ消えたのだ。
ムスッとほっぺを膨らまし手のひらで押し込んでプシュッと空気を抜き無理やり口角を上げてから台所へ向かった。
「あらノエル早かったねぇ。…あら、フランはどこいったのかね？」
「あれ？おばあちゃんフラン先に来なかったの？」
「いーや私は見てないねぇ…あの子のことだからまたかくれんぼでもしてるのかもねぇ…多分、家の中にいると思うからご飯だよーって呼んで来てもらえるかい？」
「はーい！」
出来るだけ悟られないように笑顔で返事をした。
トイレやら子供部屋やらを見ていったがどこにもおらず気持ちが焦っていった。
が、灯台下暗し…フランはお風呂場から少し歩いた小部屋にいた。
おばあちゃんが資料室と言っていた場所だ。
本がいっぱいあるから興味があるなら読んでもいいよとは言われていたものの字がたくさんですぐ眠たくなるのであまりで出入りは

したことなかった。
ドアを開けると何かを真剣に見つめているフランの姿があった。
いつものお調子者の顔じゃない真面目なフランにドキッと胸がなる。
じーっと見つめているとパタンとわざとらしく音をたて本は閉じられた。
「なーにそんな見つめるのー気持ち悪いっ！」
「えっ！あ！ごめ…じゃないフラン!!急にいなくなったらダメって約束したのに！」
「あー…そういえばそんな約束したねー。でもさーノエルー…ミーは約束…守れないかもしれないやー」
は？とぽかんとした顔でフランを見つめる。
フランは本を棚に戻しながらなんともないいつもの顔でそう言った。
「あー、そういや貯蔵庫に行って飲み物とって来ないとなかったよねー」
「そ…そうだっけ？一緒に…行く…」
約束、守れない…その単語が頭をぐるぐるさせうまく話せない。
きっと冗談だよ！なんて思いたいけど思えないような…そんな変な感じがして指が震えた。
キュッとフランの服の裾を摘んで一緒に歩くがそこからフランの手が伸びることはなかった。
貯蔵庫につきそこからビンを一本渡されたので慌てて服の裾を離し落ちないように両手で持った。
いつものフランなら割れ物は私に渡さないはずなのに…やっぱりなにか変だ。
何か声をかけようかと言葉を選んでいると少しだけ霧がかかったように見えたのでフランがまたイタズラしようとしてマジックを見せようとしてるんだなと思い身構えた。
が…一向になにも起きない…？
ふとフランを見ると手になにかハンマーのような物を持っている

ような気がした…いやよく見えるからきっとこれはフランの魅せてるマジックだ。
そう思い込むとスゥッと霧が晴れハンマーは消え去ったがなぜかチーズが持たれていた。
「なに…してるの？」
「今からミーの未来の記憶が少し飛ぶように仕掛けるけどそれはノエルのためなの忘れないでねー。」
「…は？なに言って…」
ドンッ！と音が響いてその場にフランは目を回しながら倒れた。
その光景にポカンと立ち竦んでしまった。
コロコロと転がり足にぶつかるチーズにはっと気が付いた。
「いや待って！なにしてるのこのバカフラン!!おばあちゃん!!フランがバカやって倒れたー!!」
ドタバタと走りながらそのノエルの声はいつもの数倍大きく廊下を響かせた。
近隣の人はまた喧嘩してるよと笑い合っていたのは言うまでもない。

6．小さな赤ちゃん

フランがチーズの角に頭をぶつけて倒れました騒動から数日が過ぎた。

あの後、おばあちゃんは最初慌ててたけど傷跡もなにもなかった為最初二人で演技してたのではと疑われた。

違うもん！と疑いを解こうと必死に説明すること五分…フランが普通に目を覚ました。

「…うー頭が痛いー。ノエルの声がうるさいー」なんて言われたので記憶が無くなるって言葉は単なるイタズラだったんだなとひとりでに納得した。

そう、この時は…。

コンコンッ…と扉の方から音が聞こえた。

運良く扉近くにいた私は条件反射ではーい！と返事をしてしまった。

「ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

聞いたことがない声にビクッと一瞬肩を震わせたが声の感じからして子供のような気がしたので少し安心した。

「えっと、ちょっと待っててください！おばあちゃん呼んでくるので！」

「…わかったよ。」

ノエルは慌ててドアの鍵を閉めてからそういったのでおそらく扉の前にいる人はびっくりしたであろう…。

でも普段から知らない人が来た時は鍵を開けてはいけないよと言われていたので当然の行為をしただけだとノエルは思っていた。

とりあえず追い返すのはおばあちゃんの役目なので呼びに行った。

ガチャリとおばあちゃんがドアを開け目の前にいた子の小ささに驚愕した。

年下だとは思っていたが…まさかこんな赤ちゃんだったなんて…！

扉の奥でじーっと眺めていたが出てくる名前にまた驚いた。

「フラン…という子供がいると思うんだ。どこにいるか知らないかい？」
…ん？なんでフランのことなんか聞くんだろう…？
「まあかわいい赤ちゃんねえ！
フランなら川の上流に遊びに行ってるわ。
ここを北に行ったところにある川なんだけど…。」
今日はフランが朝から暑いから水辺で遊ぶからお弁当がいい！とか言ってたなーなんて言ってたけど私は怪我のこともあり外に出るのは怪我が治るまで禁止にされてしまったのでお留守番扱いだ。
本当は少しも離れたくないんだけどこればかりは仕方ない…。
「ちょっと待ちなさい暑いでしょう？ミルクでも飲んで行って…あら？」
「…？おばあちゃんどうしたの？」
「…変ねえ…さっきまで赤ちゃんがいたと思ったんだけど…いなくなっちゃったわ。」
「えっ？でも今さっきまでここに…あれ？」
扉の外に出てさっきまでいた赤ちゃんのところまで走って行ったが足跡すらも無くなっていた。
夢かとも思ったがおばあちゃんも見ていたしそれは考えにくい…。
ゾクっと背筋が凍るような悪い予感がした。
そんな赤ちゃんがフランの居場所を聞いたんだ。
「ハッ！まさか！」
前に見た黒い人達がフランを連れ去ろうとした夢を思い出した。
嫌だ嫌だと身体が震えだすが今は外出禁止だ。
おばあちゃんが家の中に入っていくのを確認してから心の中でごめんなさいと唱えながら外へと飛び出していった。

ガチャッという音と走りだす音を聞きながら部屋の中に取り残された老婆は少し寂しげな表情をしながら手紙を手に取った。

「あの子達ならきっと大丈夫ですよね。ボンゴレの９代目…」
そう呟き元通りの三つ折りの形に織り込んでそっと机の中にしまった。

7．幻覚という言葉を知りました

村のみんなの目を盗みこっそり出てきたのはいいものの暑さのせいもあり体力がどんどん奪われていった。
はぁはぁと息を切らすが休んでる暇はない…本当に夢の通りならあの人達より早く着かないと間に合わず連れていかれてしまう…。
「そんなこと…させないんだから！…なにっ!?」
意気込むと同時にボッと白い炎が手に灯った。
その勢いに驚き思わず尻餅をついてしまった。
この前と違い紫色の濃度が高くより強く揺れている…。
しかし不思議と前と違い何かに取り込まれそうな感じもせず怖くもなかった。
スッと両手を合わせ指を絡ませて握り頭にくっつけ願い事をする時の格好をした。
この炎なら叶えられるかもしれない…。
「お願い…フランに会わせて…」
グッと力を込めてから手を離し一度顔を手でパンッ！と叩く
よしっ！と気持ちを切り替え立ち上がり目を開ける。
「あ…れ？なんで…見えるの？」
辺り一面ボヤけて見えにくかったのに今や遠くの景色まではっきりと見える。
音も小鳥のさえずりがクリアに聞き取れる程戻っている…。
いや…今は気味悪がってる暇は無い。
早く追いつかなきゃいけないんだから！
グッと足を踏み込むといつも通りの力のはずなのに先程とは比べものにならないぐらい速く走れた。
それもそのはず、視界がクリアになった分足を頭の処理さえ追いつければなにも躊躇せずに走り込めるからだ。
木々を掻き分け上流までついた…と思った。
「な…もう…いないの…？」
滝が水面に打ち付ける音が凄いこの場所は五感の鈍っていたノエ

ルにとってあまり好きでは無い場所でいつも震えていた。
滝の音以外なにも聞こえなくなり水で感覚が鈍るからだ。
いつもはフランがいるからまだしも今は一人で周りに誰もいない…ふと滝を見上げてみた。
さっきまで走ってきた道を目で追っていきあることにノエルは気付いた。
「フランの行ってた川の上流って…もしかしてこれよりも上にあるの…？」
グッと首を真上にあげて確認する周りから周り込もうかとも思ったが坂道など何処にも見えず、この崖を登るほかないと判断するのにそう時間はかからなかった。
でもどうやって登ろうか？
手を出っ張っているところに置いていき一つ一つ登って行くぐらいしか思いつかない…。
やってみるしかない！と試しに数段飛び上がってみる…が３つ目の出っ張りにしがみついた瞬間その岩がポキリと外れそのまま地面へと落下した。
その瞬間炎が激しく地面の方へと伸びるように燃えていった。
「きゃあっ!!」と声を上げたが痛みはなにも感じない…。
前にも感じた感触に恐る恐る足元をみる…氷だ。
フランを探しに行った時にできた氷の道と同じものだ…冷たくないし滑らない変な氷…。
しかも今回はノエルを包み込むような形になっている。
「…またフランのところまで連れて行ってくれるの…？
お願い、この滝の上まで私を持ち上げて!!」
途端にぐんっと氷が空高く伸びていき一気に滝の上までやってきた。
が、その勢いが私の気持ちと比例して凄まじくノエルはうわあぁぁ!!と変な声を出さずにはいられなかった。
ぽいっとその氷から投げ出されそのまま川の中へと墜落する。
バシャンと音がなり水の中に落ちた。

驚きのあまりいつのまにか炎が消えていたからだ。
炎が消えると同時に氷の塊も消えていた。
ゲホッゲホッと飲み込んでしまった水を吐き出し顔を手で拭う…が視界がまたボヤけていた。
何度も拭ってみるが治るどころか酷くなったので元の視力に戻ったのかとすぐに察した。
…にきてもさっきから誰かいるような気がする…。
話し声もうっすらと聞こえるが川の音でかき消されて聞こえない…。
誰か近付いてくるが怖くて上を向けない。
パンッとほっぺを叩かれ上を向けさせる。
その瞬間ブワッと目から涙が溢れた。
「ほんっとノエルはバカだって今みたハッキリ分かったよー。」
「フラン…っ!よかったぁー!!会いたかったよー!!」
フランの手の上に自分の手を重ね本物だということがわかり安心したのか、うわぁぁんと声を上げながらいつのまにかポロポロと涙を流していた。
「はっ!そうっ、いえば…フランのこど、赤ちゃんが探してだ!!連れてかれると思っでボクは!!」
「あーとりあえず落ち着いてー…どーどーっ。赤ちゃんがなにか知らないけどなーんか変な人に命を狙われてるんだよねー…」
クイッとまた顔を向けさせられるとボヤけていたが数名の影がハッキリと見えた。
片方は色とりどりだったからわかりやすかったけど片方は真っ黒で見分けがつきにくかったが四人ほど影が見えた。
グッとフランの手を借りて立ち上がる。
そのまま離さないように心配をかけた罰も込めて力一杯手を握ってやった。
イッ!て声が漏れてたけど握り返してくれないから知らんぷりしておくことにした。
「う、おぉい!誰だぁそいつはぁ!?」

やっと耳に入った言葉は怒鳴りつけるような声でその声の主に近づいてようやく薄っすらとだが顔がわかった。
この人、前にフランに魅せてもらった人達にどこか似ているような気がする…！
「今この妖精たちはなぜか怒っているので早急に答えたほうがいいよー」
「ぜーんぶお前のせいらびょん！」
「な、なんかよくわかんないけど大きくなったフランがお世話になった人達だよ…ですよね！」
私のその言葉にその場が一瞬硬直した。
やっぱり言葉遣いがおかしかったのかと少ししょぼくれながらノエルは再び口を開いた。
「えっと…ボ…ボクの名前はノエルなのです。フランと同じ家に住んでる…家族です！」
「ふぅん、家族…ね…全く似てないわねぇ…。」
「ミーたちは血が繋がってないですからねー
なーんで一緒に住んでるのかとか知らないですけどー。」
「その頭に被っているものは…貴方が見せているものなんですか？」
は？という顔をして振り返ってしまったので凄く睨まれてしまった。
スッと頭に手を置いてみたが特に濡れているということ以外なにもない…。
「被りもの…？ボクなにもつけてないはずなんだけど…
あっ、フランまたなにかイタズラでもしてるの？」
「イタズラじゃなくて常日頃からやってることだったんだけどなー…
ノエルはやっぱりわからないんだねー」
「う゛おぉおい…どういうこった？」
「もしや…幻覚が効かないとでも言うのですか？」
さっきよりも怖い顔になってノエルのことを全員が見ている。
やっぱりボクはおかしい子なの…？空いている右手で服を胸の辺りでグッと握りしめた。

幻覚ってなに？被りものってなに？
いろんな考えで頭がパンクしそうになる。
「つーかさ」
そんな空気を引き裂くかのように口を開いたのは前髪が長く頭にティアラを乗せている人だった。
引きちぎれるんじゃないかってぐらい大きな口をニンマリとさせながら話す姿はとても怖かった。
「幻覚効かねー人間って相当ヤバくね？王子キョーミあんだけど！」
ししっという笑い声をあげながらその人はキラリと光るナイフを指に挟んで睨んできた。
「だから待てベル!!」
ビュッ!!と投げ出されたナイフに私は反応することも出来ず、ただ真っ直ぐ立っておくことしか出来なかった。

8・提案

立ち竦むってこういう時の事をいうんだなって…
目の前に飛んでくるナイフがスローモーションのように見えたけど身体がピクリとも動かなくて固まっていた。
ナイフが当たるか当たらないかという差でドンっと身体を押し倒された。
フランがノエルを覆い被さるようにして反射的に守ったのだ。
タタンッといい音を出して後ろの木にナイフが刺ささる。
「なにぼけーっと突っ立てるのか分からないけど
ミーはあいつらに命を狙われてるって言ったよねー？」
「…こ、怖くて動け…なくて…ヒッ!!」
ごめんなさいと言おうとした時には頭上にナイフが円を描くように規則正しく並んでいた。
半分くらいいつもの冗談だと思ってた。
イタズラに命を狙われてるって言ってるんだと思ってた。
でも違う、本気でこの人はフランのこと…ボクを殺そうとしてる。
「ベルちゃん！やり過ぎよ!!怪我でもしたらどうするの!!」
「そんなの避けれなかった方が悪いしっ」
バイバイと言い放つとそのままノエルとフランめがけてナイフが落ちてくる。
ダメ、殺さないで…!!
「フランを殺さないでぇぇぇぇ!!!!」
ブワッ！とノエルの身体に炎が灯りナイフを全て凍らせていく
ピキピキと音を鳴らしながらナイフを投げてきた張本人の元へ氷が伸びていった。
「やっべ！」
そう言いながらもう一本ナイフを取り出し彼自身の手の周りに振りかざした。
そのまま伸びていた氷もその場に落ちる…ノエルがグッと手に力を込めるとそのまま氷は全て粉々になりキラキラと光を放ちながら

消えていった。
　中にあるナイフごと全てだ。
「うおぉい！白色の炎なんて聞いたことないぞぉ!!」
「えぇ、僕も見たこともない色の炎ですね…。」
　敵対心の無さそうだった人までもがグッと武器を構え戦闘体勢に入る。
「見たことないとか知らない!!フランのこと殺さないで!!
　傷つけないで!!フランがいなくなったら…ボクは…」
（ボクはどうなってしまうんだ…？）
「はーい、そこまで！ストップよぉ!!
　みんな武器を下げてちょうだい！スクアーロもベルちゃんもそうカッカしないの」
　手をパンパンと鳴らしながら派手な格好をした人が叫んでいる。
「わー唯一ミーのこと攻撃してこなかった人が止めてくれましたー
　これは奇跡というやつですかねー」
「一々気に触るガキらびょん!!」
「やっぱり殺しとくべきじゃね？」
「だからぁ!!話をややこしくするな〝ぁ!!」
　周りのみんながガヤガヤと言い争いをし始めてる中一人だけさっきの派手な格好をした人が歩いてきて目の前にしゃがんだ。
　サングラスを掛けているので何を考えてるかわからないけど口元は笑っているように見えた。
「ボク、ノエルって言ったわね。この炎のこと教えてくれないかしら？」
「…知らない」
「生まれ持った能力とか…そういうのかしら？」
「知らない!!わかんない!!ボクにはなにも…わかんない」
「ミーも全くもってこれっぽちも知らないので話を振らないでくださーい。」
「クフフ…おもしろい人が増えましたね。
　フランの無くなった記憶もしっかりとあるようですし」

無くなった…記憶…？
「どういう…こと？」
「ミーもよくわかってないけどノエルのことは分かるのでこの妖精達の勘違いだと思いたいんだけどねー」
「？フランが未来の記憶を失ってる、それだけの話だ。」
驚きと恐怖のあまりかシュウッと炎が消えた。
だから最初に挨拶した時に驚かれたのかとすぐに分かった。
「だがこんなガキ未来で見た記憶はねーぞぉ
あの未来では死んでいたってことか？」
「死んでたとしたらなんで記憶があるのかしら？」
「そ…れはフランがマジックで魅せてくれた…だからわかる…
途切れ途切れだけど…」
「なんと！思ってたよりも強力な術師になりそうですね」
クフフと笑いながら今度は穏やかそうな人がこちらに歩いてきた。
片目がノエルと同じで赤い…変な感じだ。
「ただフランを連れて行くにはこのノエルもセットにしないといけないと考えると
やはり充実したヴァリアーで育ててもらうのが一番いい！」
「元々未来ではお前の弟子だぁ!!お前が一人前に育て上げてから必要な時にレンタルさせてもらう!!」
お中元だのなんだのという話が出てくるし後ろにいる女性はフランなんていらないなんて言ってるし…
大きな紙が出てきたかと思ったらあみだくじ？というのをするとか言い始めてるし!!
って、今気付いたけどもしかしてこれフランを殺そうとしてたんじゃなくて連れ去ろうとしてる…？
「なーんかおもしろそうですねー、ミーが決めてもいいですかー？」
よいしょっと川に浸かっていた重い腰をあげフランは先程の片方の目が赤い人の方を指差した。
「ただついて行くとしたノエルはあっちについてってくださーい
お願いしますね虫歯菌の皆さん」

「えっ…どういう…」
「誰が虫歯菌だ誰が!!」
「そしたら一人ずつで平和じゃないですかー
ミーはこの力ノエルに効かないのつまんないなーと思ってたのでー」
ドクンドクンと鼓動がどんどん大きくなる。
話の流れ的にフランと離れ離れになる…?
「そんなのやだ!」
精一杯の反抗をしながらフランを掴んでる腕をより一層強く握った。
が、スルリと抜けられてしまった。
「フラ…ンなんでぇ…」
ブワッと涙が溢れてどんどん視界が曇っていく
「ノエル、ミーと勝負しませんかー?」
「ふぇ?」
その言葉の意味がわからずに驚いて変な声を上げてしまった。
ポタポタと顔を濡らす涙が溢れるのがよくわかった。

9．また会える日まで

勝負をしませんかー？
だなんて、フランが言うとは思わなくて思わずポカンと口を開けてしまった。
「ミーはノエルを騙せなくてつまらなかったからねー。
だからノエルを騙せるようになるまで強くなってやりますからー！
ノエルはその力をコントロール出来るようになったらまた会いましょうー。」
「うおぉぉおい!!勝手に決めてるんじゃねぇ!!」
「ほう…僕は大いに賛成です。そちらの子供に教えられることはこちらにはありませんからね」
「だ、ダメ！ボク…ボクはフランと一緒じゃなきゃ…ヤッ…!!」
フランに肩に手をポンと置かれヤダという言葉を遮られた。
ジーと目を見つめられた為反射的に目を逸らしてしまった。
「はーい、今のでミーの勝ちー。ノエルは早くミー離れして昔みたいに笑えるようになってくださーい。」
「わ、笑えてるよ！ボクちゃんとほら！」
指を口に咥えて左右に引っ張り無理やり口角を上げてみるがフランの表情は変わらなかった。
フランはもう向こうの人達について行くって決めてるんだ。
もうノエルがなにを言っても無駄であろう…フランが肩から手を離しそれじゃあー…と言う声が聞こえた。
「ノエル、約束。絶対また会えるから」
「…うん！」
こくんと強く頷いてフランと目を合わした。
と、その一瞬の隙をついた。
バシャンッ!!
思いっきりフランの顔を目掛けて川の水をかけてやった。
フランは少しだけびっくりした顔をして尻餅をついた。

離れ離れになるんだからその前に一言文句言ってもいいよね？
「フランのバーカ!!ボクはフランより強くなって
強くなってまたすぐ見つけ出してやる!!
だから…絶対また会いに来て…ボクを忘れないでね」
徐々に声がかすれていく…
やっぱり寂しいものは寂しいのだ。
「ミーより強くなれるかは知らないけどー
まー気長ーにまっててあげるよ。」
うんっ！と強く頷きパンッと手を強く叩き合わした。
強すぎて少し痛くて二人とも川の水で冷やしていたのはここだけの秘密だ。
少し痛みが引いてきた時、丁度後ろにいた人達も話し合いが終わったみたいだ。
白い炎の珍しさで9代目やボスがどうのこうのと話していたけど難しい話だったのかイマイチなにを話しているのか分からなかった。
フランの手を掴み行くよと立ち上げさせる。
今度は振り払われなかった。
「それじゃあね、フラン。約束守ってね。」
「それはこっちのセリフだしー…まぁ、ミーはノエルに負けるなんてことする気もないけどねー」
「ムッ、なんか今のムカついた！」
ちゅっと音を鳴らしてフランのほっぺにキスをした。
えぇ!?と周りが騒めいたけど気にしない。
それよりもびっくりして目を丸くしていたフランがおかしくてぷっと吹き出してしまった。
「また会えるって信じてるけどひと時の別れだもん。
またねっていうまた会うための約束のちゅーだよ！
おばあちゃんに教えてもらったの！」
「いや挨拶の仕方違うから…それに男同士で本当にキスするとか…」
顔を青ざめてショートヘアーの女の人がそうぼそっと呟いた。
ん？とはてなマークを掲げたのはノエルただ一人

フランはまぁこうなるよねと分かっていたのか口を開いた。
「あーノエルはこう見えもちゃんとした〝女の子〟なので丁寧に扱ってくださいねー。後、常識もマナーも教え込んでないんでーではー」
そういうとこれ以上質問されるのは嫌だというようにタタッと走っていった。
と、その瞬間ノエルの頭からオレンジの被り物が消えた。
ノエル本人には分からなかったが周りの人達はこれでフランが幻覚を見せていてノエルに幻覚が効かないというのがハッキリと伝わった。
また、フランはノエルと決別するという意味でもあったのだろう。
フランのことだからそこまで考えてないのかもしれないが…
またねと少しだけフランが笑って手を振ってくれたので辛いが頑張って笑顔でノエルは倍にして大きく手を振った。
ブワッと風が舞い慌てて腕で顔を隠すと風が止んだ瞬間もうフラン達はいなくなっていた。

１０．自己紹介

「うおぉぃ!!ガキィ!!」
「ひゃいっ!!」
あまりの声の大きさにビクッと身体を揺らしてしまった。
やっちゃった…と思いながら恐る恐る後ろを振り向こうとしたが怖くて向くことができなかった。
ふるふると震えていると脇に手を入れられ途端に脚が宙に浮いた。
「わっわっ!高い!怖い!!」
そう叫ぶとくるりと向いてる方を変えられ地面に降ろされる。
「はい!大丈夫よ。さっきのベルちゃんみたいに怖い思いはさせないからね!」
「ほん…と?」
「えぇ、本当よ!そうよねベルちゃん?」
「まぁ、そのヘンテコな力に王子キョーミあるし?今は手は出さねーよ」
ししっと笑いだから軽々しく言うもんだから一回引っ掻いてやろうかと思ったけど脇に手を入れられたままで動けなかった。
シャーッと軽く威嚇してると余計笑われた。
「それじゃあ、先に自己紹介するわね!私はルッスーリア
気軽にルッス姐さんと呼んでくれたら嬉しいわ!」
「ルッス…姐さん?」
「そう!はーい次はスクちゃんしっかり仕切ってちょーだい!」
スクちゃんと呼ばれた人はノエルと同じか少し暗めの銀髪で、とても髪が長い人だった。
同じような髪色の人を見るのは初めてだったので声がうるさくてビクビクしていたがノエルが一番気になっていた人だ。
「あ゛ぁ!?ま゛ぁいい…俺の名はスクアーロ。S・スクアーロだ。」
「スクちゃん!かわいいね!!」
「あらま!」
声からして男の人だとは思ったがスクちゃんと呼ばれる彼がかわ

いくて自分もスクちゃんと呼ぼうと決意した。
「だぁれがスクちゃんだぁ!!だれがぁ!!」
怒られたのでたまににしといてやろうと決意をしなおした。
「はいはい、でそこにいるのが…」
「俺はレヴィ。レヴィ・ア・タンだ。」
「通称ムッツリスケベのエロオヤジ」
「ベル!!貴様なに嘘を!!」
「まぁ、半分嘘じゃね〜ぇ…お前はあまりあいつに近づくな。」
な、と言いながらスクアーロもノエルの横にしゃがんで頭を撫でてくれた。
やっぱりそこまで怖い人じゃないんだなって少し嬉しくなった。
ところで…
「ムッツリスケベってなーに?」
「だっ!?あ〜ぁ…まだお前は知らなくていい…」
「まっ!珍しく隊長が困ってるわ!」
「うお〜ぉい!!うるせぇ!んでそこにいるやつがベルだぁ」
ビッと指を指した方向を向くとノエルにナイフの攻撃をしてきた人が立っていた。
「オレはベルフェゴール。よろしくなヘンテコな炎のチビ」
そうだ、この人達はフランとボクを殺そうと…
思い出したら脚が震えてきた…。
「こら!ベルちゃん毎回毎回ノエルちゃんのこと怖がらせないの!
女の子だって聞いたばかりでしょ!」
「ししっぃーじゃん。だってオレ王子だしっ!…んで…あれマーモンは?」
「ボクはここにいるよ」
いつの間に!?と言わんばかりにみんな驚いた。
そういえばすっぽ抜けてたけどおばあちゃんにフランのことを聞きにきてたのはこの子だ。
「マーモンどこにいたんだよ」
「ちょっと気になるものがあって席を外していただけだよ」

「あの時の赤ちゃん…このチームのメンバーの一人だったのね…」
「ムッあの時の失礼なチビじゃないか。こいつをどうしたんだい？」
「ヘンテコな炎が出たからボスへのプレゼントにするんだって」
「へぇ…面白いね。今見せてもらえるのかい？」
　みんなの視線が今度はノエルへと向かう…が、ノエルには炎の出し方なんてさっぱり分からない。
　いつも泣いて悲しい時に出るようなら気もするが泣くと必ず出せるわけじゃない。
　フランがコントロールしてと言ったのも頷ける。
「ボク…炎の出し方なんて知らないよ…。」
「まだコントロール出来ないというのは本当のようねぇ…」
「マーモンは白色の炎ってのは聞いたことあるかぁ？」
「いや、聞いたことも見たこともないね。こいつはその白色の炎とやらを出せるのかい？」
　こくんと首を縦に動かす。
　嘘をつくと殺される気がして怖かった。
「そうそう、こいつナイフからワイヤーに沿って氷を伸ばして攻撃してきたんだぜ！殺しがいがあるって思わね？」
　またナイフをチラつかせて言うもんだから恐怖で肩を揺らしくるりと反転してルッスーリアの胸に飛び込んでいった。
　もうベルちゃん！なんて怒ってるけど一向に反省しない態度に腹が立った。
「恐怖で炎が出てるわけじゃねーのか。マジでわっかんねーな」
「どういうこと？」
「ごめんねぇ…ベルちゃんは言葉足らずなだけで炎の出し方を知りたいだけなのよぉ…。」
　ふーんと思ってベルの方をもう一度見た…けどニヤニヤしてるだけでそんな素振りこれっぽっちもなかった。
　怖さがピークに察したら怒りに変わるとかあるのかな？
　全くわからないけどなんだか腹が立ってきた！
　キッと睨み付けると嬉しそうにししっ！と笑ってくる。

「やだ！ボクこいつ嫌い!!フラン殺そうとした奴なんかいい人じゃないもん!!」
「嫌いでケッコーだよチービ。」
ぐぬぬっと睨み合い火花が飛びちるがルッス姐さんにこらこらやめなさいと止められたのでふんっ！と顔をそっぽ向け一時休戦となる。
ここから私とヴァリアーとの生活が始まるのである。

ヴァリアーと生活編

11．新しいお家

あの後、ルッスーリアに抱っこされながら山を降りおばあちゃんに挨拶するか？と言われたけどなんて言えばいいかわからなかったから手紙だけマーモンに届けてもらった。

私とフランは大丈夫だよって、そんなことを手紙に書いた。

ヴァリアーのみんなのことは書くなって言われたけど…私が手紙を書いた後にスクアーロが小さく連絡先のようなのを書いていたのでちゃんと考えてくれてるんだなって軽く考えていた。

そこからは緊張の糸が切れたのか眠ってしまってぷっつりと記憶がない。

そう、記憶がないからここがどこかもわからない。

寝ていたベットから降りておもむろにそばにあったカーテンを開ける。

うぅっと眩しい光に照らされて目がしばしばする。

外が明るいからまだそんなに時間は経ってないのかな？

んーと背伸びをして目を擦る。

やっぱり視力は悪いままなので全体的にボケている。

そういえば連れてきてもらったみんなに説明してないと気付き慌てて外に出ようとした。

が、ドアをあげようと少し開くとガヤガヤと忙しそうに大人達が走り回ってるのが見えた。

ここまで耳も悪くなったのかとノエルは溜息をついた。

もう大丈夫かな？としばらくしてからドアを開けてみた。

お、今度は逆に誰もいないや！

「わぁ！凄い！お城みたい!!」

長く続く廊下に高い窓を見つめ気持ちが高ぶったノエルは思わず声に出ていた。

わーい！と喜びながら広い廊下を走り回っていると角から誰かが飛び出しそのまま衝突した。
ぐへっ！と声を出しノエルは尻餅をついた。
「ん？貴様は誰だ!!」
「ふぇ？ボクのこと？」
ぶつかった鼻を手で覆い隠しながら声の主のことを見あげた。
真っ黒の服に身を包んでいる男の人が三人ほどいた。
背が高いなぁなんてのんきなこと言ってる雰囲気ではなくキッと全員から睨まれているような気がした。
「どうする…ガキ一人だったら俺でも殺せるが…」
「いや待て、殺す前にレヴィ隊長のところまで連れて行くべきなんじゃないか？」
「一昨日の任務の話じゃないのか？子供を連れてくるとかなんとかの…そのフランとか言ってた…」
「ふむ、そうだな。さっさと連れて行って任務に戻ろう」
「俺が連れて行くから他二人は残って作業を続けてくれ」
「えっ？えっ？えええええ!!」
ぽかんとしている間に相談事が終わり米俵を担ぐように肩にひょいと持ち上げられた。
「わー！おーろーせー!!ボクはちゃんと歩けるぞ!!」
ぽかぽかと担ぎ上げてきた人の背中を叩くが一向に止まる気配もなくやっと止まったと思った時にはもう地面にドサっと落とされていた。
お腹が圧迫されていた為か気持ち悪くて目をぐるぐると回らせた。
「お前達どうした？そんな慌てて」
「レヴィ隊長！怪しげな子供が廊下にいた為連れてまいりました！
また、怪我をしていましたので先程の事故のガラスでやられていたかもしれません。」
「…ノエルじゃないか。やっと起きたのか」
「あ、レヴィ隊長ってムッツリさんのことだったんだー！」
「ぷっ…「おい聞こえてるぞ」失礼しました！」

「今すぐルッスーリアを呼んできてくれないか？その後お前は任務に戻ってくれ」
「はっ！わかりました!!」
ドタバタと走ってその場を離れていく…レヴィって隊長って呼ばれて慕われてるんだ…。
てっきり自己紹介の時はあれだけからかわれてたから下っ端だと思っていた。
「レヴィお偉いさんなの？」
「…俺よりもっと偉い方がいらっしゃる。とても素敵で尊敬できる人だ。それより足の裏を出せ。
ルッスーリアに見つかる前に応急処置ぐらいはしとかんとな。」
なんで？とでもいうようにこてんと首を傾げる。
「お前…痛みがわからんのか？」
恐る恐る足元を見る…血だらけだった。
無数の引っ掻き傷やガラスが刺さっていたりでボロボロだった。
その光景を見てほんの少しドクンドクンと脈を打つ感覚がして痛いかもと思い始めた。
「んーとね、ボク五感が鈍いんだ。
目は周りがぼやけてるし、耳はたまに近くの音でも聞こえないし、痛みや重みとか感じる事も出来ない時もあるの。
だからね、フランとは毎日リハビリしてたよ！」
「…そうか」
レヴィは顔色ひとつ変えずにそうかとだけ話した。
ガラスの破片を取り除いて消毒をしてくれてるのがちょっとしみて痛かった。
この痛みは感じるんだな…。
「…あのね、迷惑とか思わな「ノエルちゃんが起きたって本当かしら!!」…い？」
バンッとドアを開けて入ってきたのはルッスーリアことルッス姐さんだった。
あれマーモンとベルもいる？

「まぁ！怪我しちゃって…ボスとスクアーロのせいね！」
「なにを言う!!スクアーロが一方的に悪いんではないか！」
「元はと言えばそこのチビが起きないからだけどね。」
「ボク…そんなに寝てたの？」
「一昨日からもうぐっすりとね。死んだかと思ったよ」
そんなに寝てたのかー通りでぽけーと頭が働かないわけだ。
「にしてもボロボロじゃない…ベルちゃんのお下がりの靴入らなかったの？」
「…靴？」
「履いてないんじゃなくて気付かなかったんじゃないのかい。
見た感じガラスにも気付かなくて走ってたんだろ？」
ドキッとした。
赤ん坊なのにいとも簡単に言い当てた。
「ししししっ！大当たりっ！」
ピュッと何かが飛んできて慌ててルッスーリアが受け止めてくれた。
「もう！投げないで頂戴！」
「マーモンちゃん凄いね！私より〝年下〟な赤ちゃんなのに！大当たりだよ！」
「ムッ…ボクは赤ん坊の姿なだけで君より大分年上だよ」
「うっそだー！ぜーったい信じない！」
あんな姿でボクより歳上とか信じられない！と言うと信じなくてもいいよっとそっぽを向いた。
みんなの顔を見てもよくわからなかったからそのうち嘘かどうか教えてもらうことにしようと考えるのをやめた。
包帯を巻き終わり靴を履こうとしたが紐が多すぎて結べずベルに笑われて喧嘩したのは言うまでもない。

１２．お揃いの仲間

「ししっお前ってとことん何もできないんだな。フランがマナーもなにも教え込んでないって意味がようやくわかったぜ。」
「うるさい！普段靴とか履かなかったし！おばあちゃんの家にあった本ぐらいしか勉強できることなかったし!!」
「あーもう！二人とも落ち着いて!!」
靴紐が結局結べないわ元々サイズが合わないわで結局ベルトで締めるだけのタイプをもらった。
今着ている服もベルが買ったはいいけど結局背が伸びて着れなくなったので新品同様なのだとか…。
下着だけはきちんと女性の部下が用意してくれたと言っていたのでそこは安心する。
だが元はベルの物だからか物凄くつっかかってくる。
「フンッどうでもいいから早くボスのところまで連れてきてよねベル。」
「俺もボスが心配だ。」
ギャーギャーとノエルの甲高い声が響く
ベルがひたすら煽るものだからノエルはとことん怒鳴ってしまう。
しかもベルの言うことは普段から気にしていることを的確に言ってくるのだ。
腹立って仕方がない！
ルッスーリアは必死に止めるがベルが止まらない為、ノエルも止まらない。
はぁ、とルッスーリアが溜息をついた。
その時、ドアがまたバンッと開きノエルの声より更に大きい声が部屋を響かせた。
びっくりした拍子にルッスーリアに飛びついた。
「うおぉおい!!うるせーぞお前らぁ!!起きてるならノエルもさっさとこぉい!!」
「スクアーロのほうがうるせっ」

「なんかいったかぁ!!ベル!!」
「まーまー!もうみんな落ち着いて!ノエルちゃんがびっくりしてるわ!」
慌ててルッスーリアは抱き直してくれたが肩をポンポンと叩くとそのまま降ろしてくれた。
慣れない靴に少しふらつきながらスクアーロの元へと行った。
「フラついてるが大丈夫なのかぁ?」
「へーキだろ。あんだけ叫んでたんだからさっ」
キッともう一度ベルを睨むとししっと笑い返してきた。
ムーッと腹立つが今は無視しておこう、そんなことより気になるのだ。
「ボスってどんな人なの?レヴィがね、素敵な人だって変な笑顔で言ってたから気になるの」
優しい女性なのかなーと想像していたがノエルの発言にスクアーロが表情を濁したのであれ違うのかな?と余計もやがかかった。
「ま…まぁ会えばわかるぞぉ…」
心なしかスクアーロが小さく見えた。

ーーーーーーーーーーーーーー

ボスの部屋に着くまでルッスーリアが手を繋いで連れて行ってくれた。
五感が鈍いことをそれとなくわかってくれたみたいでふらついても足を引っ掛けても怒られなかった。
手痛くない?とか聞いても大丈夫よと言ってくれたので嬉しくてついえへへと笑ってしまった。
トントンとスクアーロがノックをしてドアを開ける。
と同時に何かが飛んでスクアーロの頭にぶつかって割れた。
「ぅお〝ぉおい!!ちゃんと連れてきてやっただろうがぁ!!」
「うるせぇ、ドカスが」
あまりの迫力に言葉を失いそうになる。
ルッスーリアが手を繋いでなかったら思わず逃げ出していただろ

う…
「あの人が…素敵なボス…なの？」
「えぇ、そうよ。私達が尊敬する素敵なボスよ！」
へぇともう一度ボスと言われる人の目を見てみる。
ギロッと睨まれ目があいヒィッ！と声に出して驚いてしまった。
やってしまったと思いつつもう一度覗くが表情は変わらずこっちを見てくる。
思わず泣き出しそうになったがグッと堪える。
「おい、そこのガキ。炎がうまくだせねぇのか？」
「えっ…あのっ…えっと…」
「はいかいいえで答えろ！」
「うぇっ!?えっと…は…い…」
「おい、スクアーロ。こいつが炎を灯したって時はどのタイミングだったか言え」
「あ〝ぁ…あの時はベルが殺そうとナイフを投げていて必死な感じだったなぁ…
ただこいつはリングもなにもなく灯せるんだぁ！」
「ほう、リング無しでか…おいガキ！こっちへこい」
その呼び出しにまたヒィッ！と声を上げてしまう。
ルッスーリアに手を離され背中を押され前に出る。
「お前はその炎が怖いか？」
「えっ？」
その表情は真剣だった。
この人本気で炎について聞きたいんだ。
相手が真剣ならその分自分も真剣になりなさいって…昔誰かに聞いたことがある。
なら私も真剣に答えなきゃと一度深呼吸をしてからボスと呼ばれる人の方を見直す。
「…はい。」
答えは元々決まっていた。
この炎を始めて灯した時の記憶はないがこの炎が原因で親と離れ

たんだというのは容易に想像できたからだ。
でも何故この人達は全く怖がるどころか逆に真剣に話を聞いてくれるのかわからなかった。
返答がもらえるかわからないけど少し無言の時間があったので自分からずっと思っていた疑問をぶつけようとノエルは口を開いた。
「…ボクの事珍しいっていうけど…こんな手から炎が出るなんておかしいよね？なんで怖くないですか？」
「あ、ぁ…そっかノエルは一般人だったな
怖くもなんともねーしその炎は俺たちにとっては強さの象徴だぁ」
見てみろと言わんばかりにスクアーロは手に指輪をはめてグッと力を込める。
瞬く間にブワッと水色の炎が灯った。
「そうよノエルちゃん私たちはみーんな炎が出せるの！」
見てみてと言わんばかりにルッスーリアやレヴィも炎を灯してくれた。
ベルとマーモンは見せてはくれなかったけどきっと二人も出せるのだろう…
「みんな…ボクとお揃い！お揃いだ！」
ぱあっと一気に笑顔になる。
初めて同じような人に会えたことが嬉しくてポロポロとまた涙を流した。

13．暴走

ポロポロと流す涙をルッスーリアがハンカチで拭ってくれた。
ありがとうって言うとニコッと優しい笑顔で返してくれるからまた涙が出てきた。
「で？ノエルの怖いってのは人と違うと思ったらからってだけかい？
他にも理由がありそうに思えるんだけど」
マーモンがヒョイっとベルの手から離れノエルの近くまできてからそう問いかけた。
「えっと…ボクは…フランとあの家に住む前までの記憶がサッパリないの…
けど、ママとパパがいたっていうのはなぜかハッキリわかる！
だから…この炎のせいで…」
ズキっと頭が痛む感覚がする。
思い出せそうで思い出せない…あの忌々しい感覚
「嘘だね。本当は少し心当たりがあるんじゃないのかい？」
顔に出てるよと鼻をぺちんと叩かれた。
本当はほんの少し…ほんの少しだけ嘘か本当かわからない記憶がある。
否、嘘だって信じたくて忘れようとしていただけなんだと思う
この赤ん坊には隠し事がなにも出来ないな…なんて思ってしまった。
「…ボクが微かにある記憶だとね…ママとパパが床に倒れてるの…周りはぐちゃぐちゃで壊れてたりして…
ボクはいっぱい泣いて…それだけ…」
「自分の炎で殺したとでも思っているのかい？」
頷きたくなかった。
唇を噛んで必死に堪えるとマーモンの方から折れてくれた。
「てかさ、指輪使って炎が灯せるかどうかやってみたほうが早いんじゃね？
ボスみてーに他の属性の炎が混じってるなら灯しやすいんじゃね

？」
「…まぁ、やらないこともないか。部下に配ったランクが低い指輪だったらまだ残っているだろう」
「そういうと思って！ちゃーんと持ってきてあるわよ！」
ぱかっと開けた箱の中には宝石がはめ込まれてる指輪が７種類ありどれも色が違ってとても綺麗だった。
「あっ、この色ボクの炎と一緒の色だ！」
「紫…そうね、その色も薄っすらと混じっていたわね。付けてみる？」
うん！と大きく頷いて渡された指輪をはめてみる。
大人用だから少しぶかっとしたけど綺麗だから気にしないでおく
「その指輪に目一杯力を込めてみろぉ」
「力…」
グッと力を込めても特になにも変化が見られずダメだーと大きく息を吐いた。
「…あんまりいいたかねぇがぁ…ボンゴレ風に言えばお前があの時なんで炎を灯せたか考えてみろぉ！」
あの時…ベルにナイフを投げられた時…
ボクは死にたくないとかってわけじゃなかった。
ただ、フランを傷つけて欲しくなった。
「…フランを…守りたかった。傷つけないで欲しくなった！」
力強く願うとボッと紫色の炎が指輪に灯った。
小さいがしっかりとした炎だ。
「まぁ！凄いわ！ちゃんと灯せたじゃない！
色は全然違うけど感覚は掴めたんじゃないかしら？」
そういってルッスーリアは頭を撫でてくれた。
褒めてくれることが嬉しくてまた口元が緩んでしまった。
スッと指輪を外すと炎が消えたのでそのまま元の位置に戻す。
念の為と他の指輪もはめて試してみたけど炎が灯ったのは雲のリングと呼ばれる紫色の指輪ただ一つだけだった。
「へぇ、雲属性なんだ。あの時見た炎とは色が逆になったぐらい違うじゃん

これじゃあダメなんじゃねーのボースっ」
「…フンッ」
カチリという音と共に目の前には銃口が突きつけられた。
ノエルにではなくルッスーリアにだ。
「あららら!?ちょちょっと待ってボスゥ!まだこの子は小さいんだしもう少し時間をあげてもいいんじゃないかしら!!」
両手を挙げて冷や汗をかきながら懇願していたがそんな台詞耳にも入っていないようでボスはノエルを睨みつけていた。
「おいガキ!嫌ってるから怖がってるとかそんなんじゃ逆に炎に取り込まれて死んじまうぞ
本気で守りたきゃ、常に死ぬ気で挑む気持ちをもて!
じゃなきゃ目の前でこいつの首が飛ぶぞ」
ドクンドクンと鼓動が早まる。
ダメだとか嫌だとかじゃ絶対にやめてくれない…この人は本気なんだ。
本気で殺そうとしているんだ。
「時間だ。死ね」
「っ!?だ、ダメぇ!!!」
バンッ!!と撃たれた銃はルッスーリアのこめかみを擦り止まった。
ピキピキと音を鳴らし飛ばされたであろう弾が無残にも粉状になり消えていった。
ピクリとボスの眉が動き拳銃をホルダーにしまいノエルに近づいてきた。
「フンッドカスが。そのやり方を忘れるな。」
ガシッと頭を強く撫でそのまま部屋から出て行った。
…ん?撫でられた?
「ノ…ノエルちゃ…怖かったわぁ!」
ノエルは自身の手を白い炎を灯したのだ。
やり方を忘れるなと言われてもルッスーリアが傷つくのが怖くて必死になっていただけでなにもコツなんて掴んでいない。
それにまだ鼓動はどんどん早くなっていくばかり…それに…

ノエルの手にはまだ炎が灯ったままだ。
ブンブン手を振っても擦っても消えようとしない
はぁはぁと今度は息まで上がって苦しくなっていく…
「やるじゃんボス喜んでたぜ?…おいチビどうした?」
今度はベルが近付いてくる。
ダメ、今は来ないでーー
「…うぅっ…消えない」
「は?」
「これの消し方わからないの!!」
ブワッとノエルの周りを氷が包み棘がベルの首元まで伸び後一歩のところで刺す寸前で止まった。
ゾクっとノエルは背筋が凍る感覚に怯え息は苦しく、もう叫ぶことしか出来なかった。
「いやあああ!!!!」
バンッとベランダが開き氷が道を作る。
そうだこの氷の上を歩いていけばみんなから離れられる。
誰も傷つかなくて済むんだ。
ダッと誰の呼び掛けにも振り返らずに走り去り、ノエルが走った後の道はどんどん消えていった。
「ノエルちゃん待って!レヴィはスクアーロを呼んできてちょうだい!」
「ししっ!ルッスーリアは晴れクジャクの準備な!王子に喧嘩売るなんて上等じゃん」
ベルがナイフを構え追いかけようとしたその時、また扉がバンッと開かれた。
「すみません!緊急事態で失礼します!!レヴィ隊長は…!?もう屋敷内に敵が侵入したんですか!?」
「敵…?敵とはどういうことだ」
「失礼しました!ただ今森林の警備隊がやられこちらに反組織の何者かが接近中とのこと!
恐らくこないだ滅ぼしたマフィアの生き残りかと!」

「そんな…!?ノエルちゃんはその方角に向かったわよね!?」
「オレその敵もーらい！ついでにクソチビも捕まえにいくからさ、後処理は任せたぜ」
それだけを伝えヒョイとベランダから降りノエルの氷の跡をベルは追っていった。
ルッスーリアはベルが血を流してノエルを殺さないかが心配で顔を青ざめていたがそれよりもボスにすぐ知らせなくてはと足早に部屋を後にした。

１４．トラウマ

遠くへみんなから遠くへ行かないと…また誰かを傷つけてしまう
傷つけるという単語が頭の中を支配するかのごとくぐるぐると回る。
どれぐらい走ったか分からないが氷の道が途切れてしまったいたのでそこで一旦しゃがみこんだ。
はぁはぁとそばにあった木に寄りかかり何度かおえっと胃液を吐き出す。
そういえば起きてから飲まず食わずですぐボスのところに連れて行かれたな…なんてのが頭をよぎった。
「ご飯もらっとけばよかった」
「ヒューッ！変な炎の少年はっけーん！」
誰!?と振り向くとそこには見知らぬ格好をした人が何人もズラリと並んでいた。
全員似たような服を着ている為、なにかの組織かというのはわかった。
でもそんなことより突っ込みたいことがある。
「…ボクは少年じゃない!!女だ!!」
「まぁ！強気でかわいいじゃない！ヴァリアーの誰かの子供かしら？
そんな情報聞いたことらないけど」
「だったらこいつ囮にすれば…？」
「まぁ！いいわねそれ！賛成!!」
ポンポンと話が進んでいき腕を掴まれる。
先程吐いてしまった為か力がうまく入らず恐怖からか言葉もうまく発せない…。
出来る限り力一杯暴れるが相手は大の大人だ。
力でねじ伏せられ黙らされた。
そんな時ヒュンッ！とナイフが飛んできてノエルを捕まえていた男の手に刺ささった。
あ゛ぁ!!と嘆きながらノエルを掴んでいた手を離した為そのまま

地面に落下した。
「ゲッもう捕まってんじゃん。チビ弱すぎね？」
「…！ベル…!!」
「てか人数多すぎね？王子大ピーンチっ！」
嬉しそうに口角を上げながらベルはナイフを手に握る。
「顔は全然ピンチそうに見えないけどねプリンス・ザ・リッパーのベルフェゴールさん？」
「あ？なんだこっちの情報は筒抜けかよ！」
ヒュッ！とナイフがボスと思わしき男の元へと飛んでいくが横の木にぶつかる。
タタンッタタンッといい音を出しながらナイフは次々と木に刺さっていく
しかし一向にナイフは人物一人傷付けることは出来なかった。
「残念だったなプリンス・ザ・リッパー
お前のナイフとワイヤーの攻撃はもう把握済みなんだよ！」
今度は敵の一人が縦横無尽に剣を振り回していく
カランカランとナイフが地面に落ちてきた。
目の前に落ちてきたナイフを拾って見てみるとそこにはワイヤーが張っていた。
剣をただ振り回していたんじゃなくてワイヤーを切っていたんだと理解するのは難しくなかった。
「っち！こいつの攻撃はわかるのに近付けねぇ…おっそういやいいもんいたじゃねーか」
クイッと顔を動かしノエルの方を見る。
逃げなくちゃいけないのに足に力が全く入らず動けない…
ふるふると震えているとさっきとは違う男がニタッと笑いノエルの髪を鷲掴みにし持ち上げた。
「…おい!!このガキがどうなってもいいのかぁ!?」
「んーー!!いーやーー!!」
「暴れるな！暴れたらうつぞ!!」
ひやっとした感覚に包まれ身動きがとれなくなる。

一瞬だけベルの顔が歪んだ気がしたがすぐにいつもの笑顔に戻った。
「…へぇ…人質ってやつ？しょうもねっ、王子キョーミなし！」
「本当にそうかい？一瞬顔が歪んだような気がするけどね」
ニタニタと笑いながら男は剣を構え直した。
「死ぬ前に教えといてやろう！これは解毒薬も晴れクジャクなんてまのも効かない猛毒だ!!
こいつをこのガキの身体に打てばどうなることかねぇ!?」
ノエルを掴んでる男の手には注射器のようなものが握られており今か今かと待ち構えている。
「お前達の攻撃パターンわかり易すぎなんだよ」
「な…に…？」
ベルの腕が勢いよく上がると同時にグァッ!!という声が後ろで響いた。
掴んでいたノエルの髪の毛を離し自分の腕を掴み悶えぽとりと注射器が落ちた。
ベルが守って…くれた？
「そんな…不可能だ！ワイヤーは全て切り裂いていたはず…!?」
「ししっ！天才のオレに不可能はなしっ!!」
ブンッと今度は大鎌がベルの首を狙い飛んでいく
「どこ狙ってんだよ。やっぱペーペーマフィアじゃこれが精一杯？」
「…フッそれはどうかな！」
ぐるっと鎌が反転しブーメランのように返ってくる。
逆に避けようもんなら今度は棘のついた鎖の持ち手が道を塞ぐ
上に避けようもんなら鎌で脚が切られるであろう距離である。
「…やっべ」
「死ねぇぇ!!」
ベルが殺される？
そう悟った瞬間にもう手は出ていた。
ピキピキと大鎌から鎖を凍らせ一瞬にして破壊する。
「なっ!?幻覚…ではないのか!?」

「へぇ、結構やんじゃんチビ」
「こしゃくなぁ!!」
今度はまた別の人達がベルに襲いかかる。
キィンッという金属音が何度も何度も聞こえてくる。
聞こえるたびに思うことがある。
ーーこの人達はベルを殺そうとしてるんだ。
ベルはボクを助けてくれた。
ボクの事怖がらないでいてくれた。
それだけで守るという対象には充分だった。
「…ベルを殺さないで」
「あぁ?」
「ベルに…近付くなぁあああ!!!!」
ブワッと炎がノエルの身体を包みこみ辺り一面氷が地面を這うように伸びていく。
一本のツララがベルを襲おうとしていた人の心臓を貫きそのまま木にめり込んだ。
グシャっという音と共に赤い雫が飛び散る。
透明な氷の上を赤い雫が流れていく
「なんだ…このガキは…こ、殺せ!!」
今度はノエルの方に敵がやってくる。
いやっ!と顔を隠す…ペチャッと手に液体がつく感触がして目を開ける。
…血…?
「お前…どこでこんな力を…ガハッ!!」
そう言って男は動かなくなった。
血だ。
血がノエルの辺り一面に広がり流れている。
自分のじゃない、周りの人たちのだ…。
まただ、またこの感覚だ。
「た、隊長の恨みぃー!!」
「いやあああ!!!!!!」

ノエルの甲高い声に共鳴して氷の刃が次々と人を刺していく。
腕を飛ばされる者、首を飛ばされる者など様々だったが変わらないのは即死だという事だった。
肉の引きちぎれる感覚と人々の叫び声がノエルの耳に入る。
聞きたくない、聞きたくない！と何度も願うが考えれば考えるほど研ぎ澄まされていく。
ノエルは身を守るかのように氷で自身を包み込んだ。
なにも見えないように
全て夢だと思い込めるように…
ポトリと最後の一人の首が飛び辺りが静かになった。
３０人余りの人数が一人残らず消え去るまでノエルの攻撃は止まなかった。

１５．血溜まり

「うお〝ぉおい…なんだ…これは…」
　スクアーロ達がレヴィの部下達から情報を聞きつけ追いついた時にはもう既に辺りは血の海と化していた。
　そこに血でベトベトになったベルがノエルを抱えてスクアーロの元にやってきた。
「やだベルちゃん！血だらけじゃない!?」
「残念ながらオレの血は一滴もねーよ。それに…ぜーんぶこのチビがやった」
「なっ!?こいつ一人でこの人数を…か。」
「追いかけてた時に聞こえた叫び声はノエルちゃんのだとは思っていたんだけど…あの割れる音もノエルちゃんから出た氷の音だったのね！」
　全員目と目を合わせニッと笑い合う…
　普通ならズンと重い空気が漂うところだがこの人達は違うのだ。
「ししし！こいつ暗殺にはもってこいの能力じゃね？」
「それもそうね！せっかくこっち側に来たんですものスクアーロが鍛えてあげればすぐ強くなるんじゃないのぉ？」
「う〝お〝ぉぉい!?俺は絶対やらねーぞ!!
　やるなら懐かれてるルッスーリアがやれぇ!!」
「あら！私は女の子をお世話はしてみたかったけど特訓になると嫌よー！肉体美はオトコの体でなくっちゃツマンナイですものー！」
「うっせぇ!!お前の美学とかは知らん!!」
　ギャーギャーと言い合いをしている二人の声を聞いてからううっとノエルの唸り声が聞こえた。
　ノエルはぷらんと垂らしていた腕を一生懸命に伸ばしベルの服を掴もうとするがそれは叶わずにぽいとルッスーリアまで投げられた。
　慌ててルッスーリアは受け止めるがその顔を見てゾッとした。
「ちょっとノエルちゃん!?顔真っ青じゃない!!」
「こいつ吐いたりするまで弱ってたから後の治療は任せた。」

「んまぁ!!それを早く行って頂戴!!」
ボゥッと勢いよくルッスーリアの右手の中指に嵌められてあるリングから黄色い炎が灯った。
そのリングから晴れクジャク（パヴォーネ・デル・セレーノ）と呼ばれるクジャクに近しい姿をした動物が飛び出しノエルに光を浴びせた。
みるみるうちに顔色が良くなっていく姿にホッとしたのか分からないがベルがそそくさとその場を去ろうとした。
「んじゃっオレ先に戻ってるから」
さっさと血を洗い流したいなどともっともらしいことを言うのでスクアーロは鼻で返事をし早く行けと促した。
が、忘れてたと言わんばかりにルッスーリアが声をあげたので一度立ち止まる。
「あ、そうそうベルちゃーん！報告書と一緒に後でボスのところにまた集合だって！」
「ゲッ…オレが書くのかよ…」
「当たり前でしょー！ベルちゃんしかその時のこと見てないんだから的確にお願いね」
へいへいと言いながらベルは部屋に戻っていった。
クジャクが光を浴びせるのをやめルッスーリアの腕をちょんちょんとつつくとありがとうくーちゃんと言いながらリングの中にもどした。
すると体力が元に戻ったのかノエルも薄っすらと目を開けた。
まだ焦点が合ってないからか虚ろな目をしているがきっと意識はあるのだろうと思い声をかける。
「ノエルちゃん！聞こえるー？聞こえるなら私の手握って欲しいわ」
そっと手のノエルの左手の近くに手を持っていくが一向に握り返す素ぶりは見せずただぼーっと一点を見つめるだけだった。
「変ね…体力が減っているだけじゃないのかしら…」
「お、おい!!バカかお前はぁ!!そいつは殺しとは程遠い世界で生きてきたただの一般人として生きてきたんだぁ!!

こんな血溜まりを見て正気になってるほうがおかしいだろぉ!!」
「あら!それもそうね!ベルちゃんが入隊してきた歳と同じくらいだったから慣れてると勝手に勘違いしちゃってたわ!」
ここは血の匂いがキツすぎる。
そう感じたのでノエルを慌てて抱っこし早々に医務室に運ぶことになり急ぎ足でその場を後にした。

16．ボクと私

ーーーーーーー

『ノエル起きて！』

んーまだ眠たいよ…と思いながらノエルは目を擦り辺りを見渡した。

辺り一面真っ白な世界で暖かい…。

あれ？さっきまで森の中にいたような気がしたのに…？

『ここはノエルの夢の中、心の中なの！』

ボクの中！絵本で見たおはなしみたい！

とノエルは目をキラキラさせながら声の主の方に振り向いた。

一目で驚愕した。

目の前にいるのは自分そっくりの人物なのだ。

まるで鏡合わせのような彼女にノエルは戸惑いを隠せずに目をパチクリさせていたが当の本人はくすくすとその様子を笑うだけだった。

『あのねノエル、私はノエル自身なの』

ボク自身…？

困っていると目の前の彼女は目線を合わすようにしゃがみ込み両手でノエルの頬を包みこんだ。

にこりと笑う彼女は怖いという感情はどこかに飛んでいったようでいつのまにか震えはおさまっていた。

『だからいつでも安心して今は私を頼っていいからね？

まだ、こうしてた方がノエルのためでもあるんだから…って

何を言ってるのかさっぱりわからないって顔、してる』

そう言ってまたくすくすと彼女は笑い出した。

なにさー！と頬をむくれてみせるが彼女の両手に押されプシュッと空気を抜かれる。

それが少し楽しくて笑いあいながら遊んでいた。

『そろそろちゃんとした世界で起きないと心配されるわね。

ノエル、忘れないでね。貴方は現実世界で一人になることがあって

もちゃんと私がいるってこと。
守るべき相手が〝ココ〟にいるってこと、忘れないでね』
そう言って彼女は自分の胸をとんとんと叩き離れていった。
否、ボクの視界がどんどん暗くなっていったんだ。
待って！と手を伸ばそうにも身体がうまく動かせなくてそのまま目を閉じた…はずだった。
薄っすらと見える世界は建物の中で色がある。
しかし視界は縦に揺れ妙に鼻がムズムズして気持ち悪い…
「はっ…はっくしゅん！」
思わず大きなくしゃみが出て意識をしっかりと取り戻した。
もふもふとした感触がくすぐったくて思わず顔を話してゴシゴシと擦る。
「あらノエルちゃん気が付いたのね！気分はどう？まだ気持ち悪い？」
走っていた足を緩くしてノエルが話しやすいように抱き直してくれた。
少し混乱して反応が遅れてしまったがにこりと笑う口元とこの声に聞き覚えがある…！
「ルッス姐さん！」
「あらあら！もう元気になったのね！やっぱりクーちゃんの力は凄いのね！」
「クーちゃん…？」
「そうよ！私のかわいい匣兵器のクジャクのクーちゃん！機会があればまたすぐ見せてあげるわね！」
「クジャク！見たい見たい！」
実際には見たことがないがクジャクという存在は聞いたことがありノエルは食い気味に答えた。
ぎゅっともう一度ルッスーリアの首に腕を回して抱きつくと違和感があり少し離れた。
何でボクは抱っこされてるんだっけ…？
「…あれ？なんか変な匂いがする…あっ！」

慌てて手を見つめてみるがそこにはもう炎は灯ってはいなかった。
ボクは炎を灯して消さなくて…それで…変な人に襲われて…？
人を…殺した？
微かに香る血の匂いと自分の記憶が合わさり納得する。
「ボ…ボクは…人を…たくさん…!!」
どんどん震えが大きくなっていくのに気付いたのかルッス姐さんは身体を引っ付かせるように抱き直してまるで赤子をなだめるかのように背中をとんとんと叩いてくれた。
「大丈夫よ。ここにいるみんなはそういうのに慣れっこだから逃げなくていいのよ。」
「慣れっこ…？」
「そういえば教えてなかったわね！それならみんなでご飯を食べながらお話しましょう！それがいいわぁ！」
何が何だか分からず困っていると部屋についたのかジャジャーン！と言いながらルッスーリアさんは扉を開けた。
その扉の先には先程いたメンバーが勢ぞろいしていた。
「ムッ…うるさいよルッスーリア」
「あらやだ、ごめんなさい！少しみんなの前でお話ししたいことがあったからつい興奮しちゃって！」
そっとノエルを地面に下ろしてから両手を取りまたにっこりと微笑んでから話し始めた。
「ノエルちゃんが怖がるかと思って避けようかと思ってたんだけど疑問に思ってたからきちんとお話しするわね！
私たちはイタリアンマフィア・ボンゴレファミリーにおける独立暗殺部隊ヴァリアーの一員なの！」
ぽかーんという顔をしているとぷっとレヴィが噴き出した。
「そんな説明じゃ、チビには分からないんじゃないの？」
「うむ、マーモンの言う通りだ。もっと分かりやすく言ってやれ」
「まぁ！じゃあ…どこから話せばいいのかしら！」
「お、おい！ノエル、本当は大体わかってるんだろううがぁ！
何が分からないのかはっきりと言え!!」

相変わらずの声量にビクッと肩を震わしたがスクアーロの言っていることはあっている。
なんとなくわかる…というのもおばあちゃんの書庫にそれらしい文が書いてあった本を読んだことがあるからだ。
ただ、物語として読んでいたことと面白くないと途中で読むのをやめてしまった為深くは分からなかったのだ。
なんて返したらいいのかわからなくて余計に困惑しているとベルがししっと笑いながら近付いてきた。
頭の上にポンと手を置き目線を合わすためにしゃがんでくれた。
「オレたちは人殺しが仕事な連中なわけ。だからお前が何人殺そうが誰も怖がったりはしねーよ。」
「ほん…とう?」
「ええ、本当よ。じゃなかったら名前も教えたりなんてしないわぁ!」
ごもっともと言わんばかりに皆が頷いた。
初めて受け入れてもらえたということに感動してか鼻が熱くなってポロポロと涙を流していた。
声を上げる時には無意識にベルの身体に抱きついていた。
その時のベルの顔が引きつっていたのはノエルは知らないが、突き放さずそのまま頭を撫でてくれたその暖かい手の感触ははっきりと伝わった。

17．素敵な食卓

ベルに頭を撫でられながらわんわんと泣いていると安心してかノエルのお腹が鳴り恥ずかしくて思わず涙が引っ込んだ。
その音でレヴィがまたプッと吹き出したので恥ずかしさのあまりにぷぅと頬を膨らませながらベルにしがみついた。
すると突然ふわりと身体が浮き上がった。
ベルが脇に手を入れ持ち上げたのだ。
戸惑う間も無くストンと椅子に座らされれば早く食えよチビとベルに言われた。
ノエルとルッスーリア以外はほとんど食べ終わっているようで慌てて手を合わせていただきますと呟いた。
ノエルにとってこんな大勢と食事をするのは初めてのことで緊張してか手がフルフルと震えてしまっていた。
といっても記憶が無い部分があるため本当に初めてかはわからないが…それでも知り合って間もない人との食事の為自分を良く見せようと少しでも気を張ってしまうものだ。
「なんでそんなに一口がちっせーんだよ。チビなんだからもっと食えよ」
「そうよぉー！遠慮せずたくさん食べてちょうだいね！」
「食わねーんだったらこのウィンナーオレがもらってやるよ」
「あー！だめ！ボクのなのー！」
挙動不審になるノエルが面白いのか度々ベルがちょっかいを出しきた。
何故だかこのベルがフランと重なって少し寂しくなってしまったが悲しんでいても会えるわけじゃないのでそっと胸に閉じ込めておくことにした。
食事が終わって片付けを手伝おうとお皿を重ねていたらすぐさまスクアーロに腕を強く掴まれた。
恐る恐る顔を見ると物凄く睨まれたので慌てて目線を逸らすとさっきよりも強く掴まれたのでビクッと肩が震えた。

「お前が怪我したらめんどくさいんだぁ！少しは自覚をもてぇ！」
「うっ…わかった…」
　渋々手を下ろすとわかればいいと言いながら掴んでいた手をスクアーロらは離した。
「そりゃ痛みにも鈍感なら処置する側にしたらめんどくさいだろうね。」
「マモちゃんまで！」
「ムッ…ボクの名前はマーモンだよ。
　…それと君にはまだ伝えてなかったと思うからね。」
　ん？なにをと問うようにノエルは首を傾げる。
「今から日本（ジャポーネ）に向かうんだよ。」
「日本…？そこになにかあるの？」
「話と難しいから他の人に聞いてくれ。ただ、君のことは色々の問題があって他の同盟ファミリーや９代目にもきちんと話さないといけないことなんだ。」
「その９代目が日本にいるから行くの？」
「いや、それはまた後日改めてってことになったよ。」
「なら他のファミリー…？に会いに行くために？」
「…ま、そんなところだよ。だからこの期間は跳ね馬と呼ばれる人のところに預かってもらうことにしたよ。」
「お馬さん…？」
「ま、着いたらすぐにわかるよ。」
　フゥとマーモンが溜息をついてから椅子からひょいっと降りた。
　慌てて手を伸ばそうとしたけどそういうのはいらないよと手をどかされた。
　赤ん坊の背丈なのに思考も動きも大人っぽくてしかもボクより何歳も年上だと言っていた…。
　色々と変だ…もしかしたら身体が縮んでしまう薬でも飲まされたのかもしれない！とひとりでに考え青ざめた。
　なーに青ざめてんだよとポンと頭に手を置かれたので声の主の方に顔を向けるとにやにやと口角をあげたベルが立っていた。

「すぐ向かうから早いとこその腫れた顔洗ってルッスーリアに面倒みてもらえよチビ」
そういうと頭においていた手とは逆の手でパチンと一回おでこを指で弾かれた。
いでっと可愛げない声をあげたせいかししっと特徴的なベルの笑い声が聞こえた。
おでこを抑えながらべー！とノエルは舌を出して反発したがその時にはもう背中を向けられていたので少し悔しい気持ちになった。
「ルッス姐さーん！顔洗うところ教えてほしいんだけど…目が腫れてるから洗えってベルが言うの！」
「あら！わかったわ。んーノエルが寝てた部屋は仮の寝室みたいなものだから…私の部屋に行きましょうか！」
「うん！」
この場に誰か一人でもいたらきっと止めていただろうけど不運なことにもみんな自室に戻ってしまった為に誰もいないのだ。
この後、ノエルが叫び声を上げて大泣きしたのは言うまでもない。

18．不安の矛先

顔は一応洗い歯磨きもしたが一向に泣き止まずえっぐえっぐと嗚咽交じりに涙を流すノエルに腹を立てたのかスクアーロが叫び、その声に便乗してまた声が大きくなるもんだから困ってしまった。

ノエルも泣き止みたいのに不安と恐怖で止まらなくなっているのだ。

いくら同じように炎が灯せるといってもまだ会って1日、起きてる時間だけだと数時間しか経ってないのだ。

それで暴れて騒ぎまで起こして…ノエルにとってはとっくの昔に限界は来ていたのだ。

ただルッス姐さんの部屋に行って泣いたのはきっかけに過ぎなかった。

それでも日本に向かうというのは変わらないのでとりあえずみんなでジェット機に乗り込む。

ヴァリアーの専用機らしく乗り込んだのはノエル達とわずかな部下と呼ばれる人達しかいなかった。

部屋はボスは奥に一人で乗るらしく幹部と呼ばれるルッス姐さん達は専用の場所、部下は前にある客席に乗るとのことでノエルは部下の一人と一緒に乗ることになった。

女性だから安心してと言われ優しくもされたがきっと任務だから優しくしてるだけなのだろうという考えが頭から離れず、その後もビクビクと震えていたのだった。

どのくらい時間がたったのだろう、いつのまにか泣き疲れて寝てしまっていた。

目が覚めた時には周りは光に包まれたくさんの背の高い建物が並んでおり目線を下げると至る所に人が歩いていた。

慌ててお辞儀をしたりする人や機嫌が良さそうに肩を組んでいる人様々で村の空気しか知らないノエルにとっては見るもの全てが珍しく目を輝かせていた。

「あら！ノエルちゃんやっと起きたのね
凄く長い時間眠っていたから心配だったわぁ！」
背中におぶさっているノエルのことを持ち直してから降りる？とルッスーリアは聞いたがおぶさっている本人はふるふると首を振った。
少しでも高い位置からこの景色が見たかったのだ。
光っているのに文字が書かれてあるように見えるので恐らく看板だと思うがノエルは日本語がほんの少ししか分からないのだ。
綺麗なイルミネーションだなぁぐらいに感じ取っていた。

とある大きなホテルに着くや否やルッスーリアの背中から飛び降りて走り回っていた。
綺麗な装飾品や磨かれた床を見て感動したのだ。
「おいチビ、走り回ってんじゃねーよ」
ガシッと頭を掴まれそのままお腹に腕を入れられ物のように持ち上げられる。
「やー！ベル!!はーなーせー!!」
両手両足を振りジタバタ暴れ最大限の抵抗をするが効果がないどころか余計強く掴まれたのでうぇっと嘔吐いた。
「うお、おぉおい!!お前らうるせーぞ!!
お前もちったぁ静かにしろぉ!!」
「スクちゃんが一番うるさいわよ！他のお客さんが困ってるじゃな～い！」
スクアーロに指を刺されながら大声で叫ばれた為に周りの視線がノエルに集中する。
恥ずかしさと恐怖が募り頭が真っ白になった為、今日は大人しく…そしてこのまま掴まれたままでいようと思った。
エレベーターで上へと上がり止まるや否や部屋の中に勢いよく放り投げられた。
一回転し壁に足がぶつかり静止したがじーんと足に痛みを感じ涙目になりながらベルを睨んだ。

「投げることないじゃんか！」
「ばーか、お前が受け身取らないのが悪い。
だってオレ王子だもん。だからなにも悪くないし」
「だから…って…」
音もなくゆっくりと歩いて近付いてくる人にぞくりと身体が震えた。
そうだ、あの人も…あの怖いボスもここにいるんだ。
「…邪魔だ」
ひょいと片手で持ち上げられまた身体が空に浮かぶと勢いよくベルの元に飛ばされた。
背中にボタンが食い込んできてまた痛みを感じたがそれよりもボスの目が怖くて一刻も早くここから立ち去りたくてまた涙がまた瞳に溜まっていった。
「ボス直々にそいつの世話をしろということだ。
しっかりやれよベル」
「うっせームッツリ」
「なに!?」
「まーまーこんなところで喧嘩せずに早く入って休みましょうよ！ね？」
両手を合わせ右の頬に合わせてルッスーリアは懇願するように眉を下げながら話しかけてきた。
ボスのためなのだろうとすぐ理解はできたが部屋に入ろうとしない人が約2名、掴まれてるものプラス1名…
「ムッ、予想通りあいつの気配がするね。」
そんな空気を裂くようにマーモンが呟いた。
なんの話かすぐにわかったのかルッスーリアはやれやれと首を振り、ベルはノエルのことを離し地面に落とした。
「あまり周りに迷惑をかけないようにするのよ～！」
ひょいとベルの肩にマーモンが乗りエレベーターのボタンを押した。
「ししっ！じゃあ、ちょっくら行ってきますか！」

すぐに開いたドアに二人は入って行きノエルもなにを思ったのか滑り込むように自ら入っていった。
「…なんで着いてきたんだよ」
「ボ…ボスがベルがボクのお守りするんだって！だからボクが着いていくのはいいはずだよ！」
ギュッとベルの横縞の服を掴みながらノエルは顔を上げて言い放った。
やれやれというかのようにマーモンが溜息をつきながらするするとロープをベルに手渡した。
「このエレベーターを降りた後、お前は一人で帰ってこいよ」
「え？一緒じゃないの？」
「今からボンゴレ十代目…沢田綱吉をボスの元まで届けるんだ。その為にはねノエル、君は邪魔なんだ。」
「邪…魔？」
ポーンと音が鳴りエレベーターが止まる。
音もなくサッと飛び出していった二人をノエルが目で追えるはずもなく一瞬で一人になってしまった。